

生き残った鋼鉄の野獣たち ドイツ軍戦車の戦後



山崎 憲

国敗れて、戦車なし

数年前まで続いていたボスニア・ヘルツェゴビナの内戦の映像や報道写真を見ていると、旧ソ連のT-34/85やアメリカのM36といった第二次大戦時のオールタイム達が現役の兵器として使われている光景を度々目にした。

50年も前の兵器を戦場に引っ張り出す旧ユーゴ軍の物持ちの良さには感心したが、戦勝国の兵器だから戦後も部品や弾薬の供給も維持されており、兵器として運用も可能だった訳である。

対するに敗戦国となったドイツ

では、兵器は集められてスクラップにされたり、戦勝国に資料として持ち去られたりした。終戦直後の記録写真にある、集積所に無造作に並んでいるドイツ軍の戦車達の姿は、まるで屠殺場に引き出された牛や豚のようで哀れさを禁じえない。

しかし、同じ敗れた枢軸国の日本軍の戦車が、戦後も中国の国共内戦で使用されたように、ドイツ軍の戦車（一部突撃砲も含む）達にも兵器として生き残ったものが数少ないながらも存在した。ここではアバディーンやクビンカのような博物館の収蔵物ではなく、専

ら戦後も兵器として使用されたドイツ軍戦車を紹介する。

戦後のドサクサを生き残る旧枢軸国

ドイツに併合されて保護領となっていたチェコと、保護国として形式的に独立していたスロバキアは、戦後再びチェコスロバキアとして独立を果たした。“ドイツ領”だったこともあって、国内には多数のドイツ軍兵器が残存しており、国軍の再建にあたって活用された。

終戦後間もない1945年10月には機甲部隊も再建され、その中の第21戦車旅団と第22戦車旅団はドイ

スロバキア軍で使用され、撃破された38 (t) 戦車



ルーマニア軍によって東部戦線で使用する35 (t) 戦車





ユーゴ紛争中、クロアチア軍が使用するM36駆逐戦車

ソ軍の戦車で編成されていた。主にIV号戦車（H型など各種）が使用されたようだが、その他の部隊は各旅団ごとにT-34/85（おそらく、ソ連で編成されたチェコ軍団系の部隊）や英米の戦車で編成されていた。整備や訓練の便宜を図ってのことだろうが、終戦直後の混乱ぶりが偲ばれる。このIV号戦車の一部が、外貨稼ぎの一環としてシリアに売り込まれている。ちなみに、チェコで戦後ヘッツァーが再生産されたのは有名だが、これまたシリアにも売り込まれたらしい。もっとも、この場合は商談が成立していない。

この当時、チェコスロバキアはロンドンに亡命していた戦前からの西欧流民主主義者と、ソ連の息のかかった共産主義者との連立政権だったが、間もなく（1948年）ソ連の圧力に屈して共産化する。軍の装備もとうぜんソ連軍に準ずる物へと変っていく中、IV号戦車はその後も10年近く使用されたという。

ソ連に東部のベッサラビア地方を奪われるという、領土問題から

枢軸国になったルーマニアだが、スターリングラードで壊滅した機甲兵力再建のために、1944年半ばにIV号戦車の長砲身型各種とIII号突撃砲G型をそれぞれ100輦（一説にはIV号は98輦、III突は104-114輦）ほど購入した。

このIV号とIII突のセットは、当時のドイツが同盟国に供与する機甲兵器のスタンダードで、ルーマニアの他にイタリアやフィンランド、ハンガリー、そしてブルガリアにも与えられている。

しかし、部隊が再編されるや否や、ルーマニアは8月に敗色濃厚な戦局から抜け出そうとソ連に降伏し、その引き換えとして“誠意”を見せるためにドイツに銃口を向けることになる。

このルーマニアに送られたIV号戦車とIII号突撃砲については、どの位戦争を生き延びたかは判然としないが、ソ連に従ってベルリン攻防戦に参加したとおぼしきルーマニア軍のIII号突撃砲の写真も残っているので、いくつかは戦後も使用されていたと思われる。

また、1944年からの対独戦の最

中には、ソ連軍によって捕獲されたパンター（各種）が13輦、ルーマニア軍に引き渡されている。このパンターは戦後、ルーマニアが1948年に共産化した後も1954年まで軍で使用された。

一方、とくに参戦する理由もなく、強いていえばドイツに対する付き合いで参戦する羽目になったブルガリアは、ユーゴスラビアに侵入して領土の分け前にあずかったくらいで、はなはだ戦意がないまま大戦を過ごしていたが、ソ連軍が国境に迫ってくると、ドイツからこれまたIV号戦車G型とIII号突撃砲G型を供与されて戦力強化を図った。

これらの数量については諸説があり、一般にはIV号が46輦、III突が25輦といわれているが、ブルガリアの研究家カロヤン・マトフ氏によるとそれぞれ97輦、55輦となっている。

しかし、ルーマニア同様負けの込んで来たドイツを見限り、1944年9月にはソ連と休戦し、ドイツに宣戦を布告。恭順の意を示すために、ソ連軍と共にドイツ軍を追撃してハンガリーやチェコに転戦し、終戦を迎えている。

現在、ブルガリアの国立戦史博物館には、そのIV号とIII突の最後の生き残りと思われる車輛がそれぞれ残っているが、現役としていつまで使用されていたかは不明である。なぜかIV号の車体にはペンキで「NATO」と書かれているのが謎だ。

この他、対独戦争中にはパンターやIV号駆逐戦車、ヘッツァー等も捕獲しているのだが、これらも戦後生き残ったかは定かではない。

これら東欧の旧枢軸国は、戦後の混乱期から共産化された初期に



チェコスロバキアが映画の撮影に用いているヘッツァー駆逐戦車



レバノン内戦時に使われたクロムエル戦車

かけて、武器不足もあってか大戦中の使い残しのドイツ戦車を使用しているようである。

同じような状況にあったもうひとつの国が、ソ連との領土紛争という、ルーマニアと似た理由でドイツの同盟国になってしまった北欧のフィンランド。大戦中IV号戦車J型15輛とIII号突撃砲G型59輛(1943年に30輛、1944年に29輛)を購入した。

IV号戦車は1944年半ばに到着したものの、その年の9月にはフィンランドもソ連と休戦し、その条件として昨日までの友軍であるドイツとの戦争、いわゆる「ラップランド戦争」に突入。

ここでもIV号戦車は、一度もソ連軍とは戦火を交えずに母国であるドイツと戦うはめになった。それに伴い、機銃をドイツ製のMG34からソ連製のデグレチャフに換装したりもしたが、その戦いをしっかり生き残り、戦後も1962年にイギリスからコメットやチャリオットが導入されるまでは現役だった。おそらく、フィンランドは敗戦国となりながらも、東欧諸国のように共産化されなかったことで、ドイツ戦車がより長く生き残ったのだろう。

それに対して、戦車より先に来

ていたIII号突撃砲は、対ソ戦を激しく戦いながらも、8輛を失っただけで終戦を迎えている。

戦力として有効活用？—中立国

大戦前の内戦でドイツの支援を受けた、スペインのフランコ政権は、大戦中は中立を守りつつ、友好関係を維持し続けた。戦車に関しては、国産化を図ってベルデヴァを開発するが、技術力のなさから満足するような性能にはならなかった。

そんな中、1943年にはドイツからIV号戦車H型30輛とIII号突撃砲G型30輛が購入される。たちまち、スペイン軍最強の機甲兵器となったドイツ製戦車は貴重な戦力として大戦の戦火にも曝されず、無事生き残った。

戦後のスペインは“最後のファシスト国家”等と悪口をいわれて、一時は国際社会から村八分になるが、冷戦の始まりと共に一転して反共国家であることがアメリカに評価され、西側のメンバーとして、したたかに生き延びた。そんな中でドイツ戦車達も静かに余生を送り、最後は中東に売られて行ったという(時期は不明)。

戦後のスペインは、旧ドイツ系の兵器があるということで、戦争

映画のロケ地として重宝された。エンジンをイギリス製のものに換装したメッサーシュミットBf109やハインケルHe111が出てくる「空軍大戦略」が有名だが、M47がケーニクスティーガーを演じたことでよくも悪くも印象的な「バルジ大作戦」もスペインで撮影された。

さすがにケーニクスティーガーの実車を出すのは無理だろうが、せめてIV号戦車が出ていれば、もう少しこの映画の評価も違っていただのではなかろうか。

さて、中立国の中でもうひとつ親独的なながらも、やはり大戦中は中立を守ったのがトルコである。ソ連を長年の宿敵とするトルコには参戦する動機が充分にあり、また現実にはソ連がドイツとの戦いを通じて軍備を増強させていることは、脅威に他ならなかった。

そんなトルコの歓心を買うためか、ドイツは1943年にIII号戦車の長砲身型56輛とIV号戦車G型15輛を供与した。ドイツとトルコの“伝統的友好関係”に訴える意味もあったが、この時点でもIII号とIV号では仮想敵であるソ連のT-34を相手にするには、いささか心もとない。

おそらく参戦したとしても、他の同盟国への貧乏臭い援助内容か



ソ連軍によって捕獲されすぐに戦闘に投入されたIII号戦車

部の戦車大隊はパンターによって編成され、戦後最強の旧ドイツ軍戦車による部隊が誕生した。歴史のアイロニーというべきか。

とにもかくにも、当時のフランス軍の主力戦車M4よりも強力な戦車には違いないし、国内に部品や整備施設が残っていたから、継続して使用するのも不都合が少ない。戦車の国産化も再開されていたが、まだモノにならず、最大の兵器供与国のアメリカとは、互いの国益の対立から必ずしもしっくりいっていなかったこともあり、自前で運用できる戦車はなかなか魅力的だったのかも知れない。まるで、ジオンから接收したザクを使用していた地球連邦軍である。

しかし、実際使ってみると、「自走距離が短い」だの「減速機の寿命が短い」だのと悪評ブブンの有様。結局アメリカから戦後型の戦車が供給されると、早々に退役させられた。

要するに枯れ木も山の賑わいといった扱いなのだろうが、誇り高いフランス人にとって、自らを屈辱的な目に会わせたドイツの兵器なんか使うのが嫌だったという国

らいて、ティーガーやパンターを大盤振る舞いしたとは思われない。例えもらったところで、トルコ軍には扱いかねるだろうから、参戦しなかったのは賢明だったといえる。

何しろ、戦間期にトルコ軍初の戦車隊を創設するために初めて導入されたのは、宿敵だったはずのソ連のT-26（1933年型）であり、ドイツ戦車は1942年に退役したこの戦車の後継車輈だったのだから、中立国として生きるのは並大抵のことではない。

トルコ軍のIII号やIV号も戦争を生き延びたと思われるが、この性能ではもはや戦後の戦車には通用しない。トルコがNATOやCENTO（中央条約機構－イランやイラクも加入していた中東をカバーする対ソ軍事同盟。現在は消滅）ができるや早々と加盟して、アメリカから兵器を供与してもらうことにしたのもうぜんだった。この戦車達もいつまで現役だったのは不明である。

宿敵の軍門に下ったフランス

電撃戦であっけなく降伏したわりには、戦争が終わるとしっかり戦勝国に名を連ね、降伏文書に調印するドイツ軍の代表に「何だ、フランスもいるのか？」といわれてしまったフランスだが、ノルマンディー上陸までの4年間占領されていただけあって、国内には大量のドイツ軍兵器が残されていた。

自由フランス軍を基幹とする軍備の再建が始まると、かなりの数が捕獲されていたパンターを使用することになった。その結果、一

フィンランド軍で使われているIII号突撃砲



民感情も一因だ。航空機の方でも、転換生産していたフォッケウルフ Fw190を戦後使っていたが、こちらも同様に短期間の使用に終わっている。それなら、使わなければ良さそうなものだが。

最後の御奉公ーシリア

1946年にフランスから独立した中東の国シリアは、1948年に南隣に誕生したユダヤ人国家イスラエルと戦火を交える。いわゆる第一次中東戦争だが、この時のシリア軍は、フランスの残っていたルノー戦車（おそらくはR35）を使用してイスラエルに侵攻し、結局惨敗する。

その後、機甲兵力の増強を図ってチェコスロバキアから（おそらくスペインからも）IV号戦車を買入れた。何ゆえ、IV号戦車だったのかはわからない。戦後の世界には、M4やT-34といった米ソのマスプロ戦車が在庫過剰になっていて溢れていたのだが、どちらの陣営にとっても明確な同盟国ではなかったシリアは入手し難かったのだろう。当時、III号突撃砲も入手したようだが、こちらは一体どうなったものか。

1960年代に入って、アラブ民族主義のバース党（イラクのフセイン大統領の政党とは兄弟政党）が政権を奪取するや、ソ連に接近して兵器を供与されるようになる。こうなると、たちまちIV号戦車の有り難味は薄れ、T-34/85といったソ連製戦車に取って換わられていった。

それでも、1965年に現在でも係争地であるゴラン高原の軍事境界線越しにイスラエルのM4とシリアのIV号が射ち合う、大戦以来の“因縁の対決”が再現されたりもし



ユーゴ内戦の時に老軀にムチ打って戦闘に参加したヘルキャット駆逐戦車

たが、この時はお互い移動砲台という使い方だったので、本格的な戦車戦にはなっていない。

その直後の1967年に勃発した第三次中東戦争では、シリア軍とイスラエル軍はまたもやゴラン高原で激戦を繰り広げたが、IV号戦車もガリラヤ湖畔等の南部戦線で戦闘に参加した。しかし、とても主力戦車として使用するのは無理だったと見えて、もっぱら掩体に入ったままの自走トーチカ（ソ連式のダックイン）として使用された。

これが、IV号戦車そして旧ドイツ軍の戦車最後の戦闘だが、相手のイスラエルは大戦中の宿敵M4を改造したアイ・シャーマンやスーパー・シャーマンを戦場に送り込んでいた。これらリニューアルされたシャーマンとIV号戦車の戦闘が実現したかどうかは定かではないが、大戦中にバージョン・アップの限界に達していたIV号では、火力を強化したシャーマンの敵ではなかったろう。

戦争事態の結果も、シリア軍は

イスラエル軍に壊滅させられ、IV号戦車も撃破されていったというから、何やら在庫一掃という言葉が浮かぶ結末である。

しかし、旧ドイツ軍戦車の中で、最後まで現役の兵器（この場合は老兵みたいな扱いだが）として生き残ったのが、火力でははるかに勝るバンターでもティーガーでもなく、IV号戦車であるという事実は、軍馬と呼ばれた堅牢さや機械的な信頼性によるものに違いない。実に、大戦終了後22年経っても戦場にあったということには、何とも感慨深いものがある。

ところで、敵の捕獲兵器でも大事に使うことでは定評のあるイスラエル軍だが、いくつか捕獲したIV号戦車は再使用していない。スクラップにしたのか、それとも標的にしたものか。いや、案外コレクターに売り払ったのかも知れない。その方がいい値段で処分できそうではないか。